

大正教養主義とR.v.ケーベル

—ケーベル教養論とその歴史的性格の検討—

東京大学大学院 松井 健人

1 はじめに

本稿は、ラファエル・フォン・ケーベル (1848年-1923年) の『小品集』を始めとした著作で展開される教養論を検討し、大正教養主義の起原と評されてきた彼の教養論の内実を明らかにすることを試みる。

「教養」概念は教育目標として掲げられることが多いが、常にその内実が問われてきた⁽¹⁾。日本では大正教養主義の成立をもって、一般的に教養概念が成立したと考えられる。そして、その大正教養主義の成立に大きな影響を及ぼした人物が、ケーベルであった⁽²⁾。

しかし、ケーベルはその影響力の大きさが指摘されることはあっても、彼の教養論そのものとその影響の具体的内容が考察されることはあまりなかった。これには、ケーベル自身が体系的な著作を記すことがなく、『小品集 (Kleine Schriften)』を始めとしたエッセイの執筆が主であったことが関係している。とはいえ、ケーベルは自身の教養論をその文章の端々で展開している。

そこで、本稿では、まず先行研究におけるケーベルの位置づけを確認し、さらにケーベルの教養論に関わる研究を検討する (第二章)。そのうえでケーベルの教養論を考察し、ケーベル教養論の特質を三点にわたって明らかにする (第三章)。そして、ケーベルの教養論の歴史的 성격について、大正教養主義との関わりを中心に論じる (第四章)。これらの考察を通じて、「教養」概念の史の変遷を考察する手がかりを提供することができるであろう。さらに、「教養とは何か」という今日的な課題に対しても重要な歴史的参照点を提供できると考えられる。

2 先行研究の検討

本章では、ケーベルの教養論を論じるにあたって、これまでのケーベルにかかわる先行研究を整理し検討することで、ケーベル教養論の位置づけを明確にすることを目的とする。とくに、第一節では、これまで多く言及がなされてきた、大正教養主義の源泉としてのケーベルの位置づけがどのように行われてきたのかを確認する。そして第二節では、この歴史的な位置づけに対して、ケーベルの教養論が、いかに理解されてきたのかを明らかにする。

2-1 ケーベルの位置づけ 大正教養主義の源泉

ケーベルの位置づけに関して、従来の先行研究では大正教養主義の源泉・立役者として位置づ

けられてきた。本稿では大正教養主義を、筒井・竹内らの先行研究が示すように、読書を中心とする文化の享受による人格形成をめざす旧制高等学校から帝国大学を中心とする大正期のエリート学生文化、として解する⁽³⁾。竹内洋は、「教養主義というのは哲学・歴史・文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度である」と定義づけた上で、「東京帝国大学講師ラファエル・ケーベルの影響を受けた漱石門下の阿部次郎や和辻哲郎などが教養主義文化の伝達者となった」とケーベルを位置づけている⁽⁴⁾。また、ケーベルを教養主義の生みの親とする位置づけにおいては、以下の三木清の回想がケーベルの立ち位置を裏付けるものとして引用される。

教養の観念は主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々によって形成されていった。阿部次郎氏の『三太郎の日記』はその代表的な先駆で、私も寄宿寮の消灯後蠟燭の光で読み耽ったことがある⁽⁵⁾。

そして、夏目漱石自身の回想においては、以下のようなケーベル評価がなされており、ケーベルを論じる際に参照されることが多い。

文科大学へ行って、此处で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の学生が九十人までは、数ある日本の教授の名を口にする前に、まずフォン・ケーベルだと答えるだろう⁽⁶⁾。

この漱石の評価に代表されるように、ケーベルその人自身の振舞い・たたずまいが多くの東京帝国大学あるいは旧制高等学校関係者らによって、「教養の人」として評された⁽⁷⁾。東京帝国大学哲学科を中心とした久保勉、安倍能成、阿部次郎、夏目漱石を始めとしたサークルが形成され、ケーベルに学んだ彼らが大正教養主義を形成していった。その意味で、ケーベルは大正教養主義の源泉となる存在として位置付けられる⁽⁸⁾。しかし、ケーベルの影響とは具体的にどのようなものを指すのか、この点は必ずしも明確でなかった。

2-2 ケーベルの教養論に関わる先行研究

前節で確認したように、ケーベルは、大正教養主義の源泉あるいは立役者として先行研究で位置づけられてきた。しかし、肝心のケーベルの教養論を正面から扱う研究は多くはない。とくに、ケーベルが影響を大いに与えたとされる「教養」についても、触れられることは多かったものの、ケーベル自身に即して論じられることはほとんどなかった。

数少ない先行研究として、伊藤直樹が、和辻哲郎、阿部次郎の教養主義への影響を論じる文脈においてケーベル思想の分析を試みている。ケーベル思想の特質を測りたいとしながらも、ケーベルについて、「古代ギリシア的、カトリック的な汎神論を持ち、そうしたしかたでコスモポリタンであるのがケーベルであるといえよう」と伊藤は示している⁽⁹⁾。しかし、ケーベルの教

養論そのものは、「一九世紀ドイツ教養市民層のイデオロギー」としてやや性急に整理されてしまっており⁽¹⁰⁾、ケーベルの著作に内在的な視点からの教養論の分析は行われていない。またケーベルの教養論に関して、渡辺かよ子は、ケーベルが理想として追求したものが、「Bildungというドイツの教養思想であった」と示すとともに、ケーベルが教養と人格との結びつきを重視した点、ギリシア古典を学習することの重要性を説いた点などを指摘している⁽¹¹⁾。渡辺の指摘は本稿にとっても重要であるが、これらの指摘はあくまで大まかな性格づけにとどまる。本稿は、渡辺の指摘を参考にしながらも、これまで考察されてこなかったドイツ教養への評価の具体的様相、そしてケーベルがドイツ教養思想を論じる際に参照とした論拠を、彼の著作に基づきながら明らかにする。伊藤や渡辺はケーベルの教養論がドイツ由来であることは示すものの、具体的にケーベルがどのようなドイツの教養論に依拠しているのかは明らかにされてこなかった。

先行研究がケーベルの教養論に必ずしも着目してこなかった理由は、ケーベル自身の著作の刊行時期あるいは著述の形式などが関わっている。たとえば、筒井清忠は以下のように指摘する。「ケーベルの周辺で起きたことは、やはり当時の大きな修養主義の流れの中での一つの伏流にすぎず、また刊行され活字となったものでこれらのことが本格的にいわれたわけではない⁽¹²⁾」。つまり、ケーベルがその著作の中で正面から教養論を論じることがなかったがゆえに、ケーベルの教養論の影響は、あくまで東京帝国大学の哲学科周辺に限定されるものであったとされる。

確かに、大正教養主義の古典である阿部次郎の『三太郎の日記』が大正3年(1914年)に出版されたことを考えれば、ケーベルの主著である『小品集』(大正8年)、『続小品集』(大正12年)、『続々小品集』(大正13年、ケーベル死後の出版)の出版は遅い⁽¹³⁾。しかし、そのことがケーベルの教養論の検討の価値を減ずることはないだろう。ケーベルは、東京帝国大学退職後の執筆とその『小品集』シリーズの出版によって、教養主義を支え続けたのである。

一例として、ケーベルの著作が教育現場において活用された点を指摘することができる。久保勉は旧制高等学校用のドイツ語教科書にケーベル『小品集』のアンソロジーを編んだ。その教科書の序言で久保は「その深き体験に根ざせるケーベル先生の純真にして靈活なる思想は、簡浄にして高雅なるその文章を通して、読者の魂を浄化し自由ならしめ、延いてその精神的教養を促進する所が少なくないであろう」と述べる⁽¹⁴⁾。ケーベルの教養論は、旧制高等学校のドイツ語教科書として採用されることで、あるいはケーベルに薫陶を受けた旧制高校教師の活躍によって、たしかに大正教養主義を促進してきたのである⁽¹⁵⁾。

以上の整理を踏まえて、本稿では『小品集』を始めとしたケーベルの著作から、その教養論の特徴と歴史的な性格を論じる。

3 ケーベルの教養論

本章では、ケーベルの教養論の内実を明らかにする。確かに、先行研究ですでに指摘する通り、ケーベルが著作において教養論を正面から展開する箇所は少ない。しかし、教養に対する言

及はケーベルの著作の節々で展開される。そこで本節ではこれらの教養に関する言及を総体的に扱い、ケーベル教養論を明らかにする。

3-1 ドイツへの敬意

ケーベル教養論は、前章でみたように、ドイツ由来のものであることが知られている。しかし、ケーベル自身はロシア人であり、ケーベル教養論にドイツへの敬意・崇拜といった側面を見いだせることに注意したい。この点はとくに、ケーベルのドイツ語の重要性・他言語への優位性に関する言及に表れている。たとえば、以下のようにケーベルは記す。

あらゆる近世欧州語の中で哲学的思索に適し又詩的表現に適する国語は実にただ独逸語あるのみである。独逸語はその語の豊富なること、完全なること、力あること、柔韌なること、表現の自在なること、形象の表現に適せること、自由なること、精神的なること及び美的なること等の点に於て殆ど希臘語の壘を摩し若しくは之に比肩し得る唯一の国語である⁽¹⁶⁾。

上のようにドイツ語への崇拜を行う反面、ケーベルは、日本そのものにはほとんど興味を示さず、日本語を覚えることもなく、講義・会話は全て英語またはドイツ語で通し、日本文化に触れることもないまま生涯を終えたのである⁽¹⁷⁾。

ドイツ語への敬愛のみならず、ロシア人ケーベルはドイツへの憧れを吐露する。最も住みたい国は無論ドイツであり、ドイツでなければドイツ系ロシア (Deutschland in Rußland) であり、最早「ロシアは私にとって存在しないも同然である」と言う⁽¹⁸⁾。「故郷とは我らがその内に生まれ教育せられ要請されたところの精神的雰囲気すなわち生まれと国語である⁽¹⁹⁾」と述べるケーベルにとって、故郷とは単に生まれた土地を意味するのではなく、精神を育み、人格を形成した場所なのである⁽²⁰⁾。このように、従来指摘されてきたケーベルのドイツへの敬意とは、ドイツ語・そしてドイツ語と結びついた精神的雰囲気・文化への敬意を意味するものであった。

3-2 人文主義的教養の重視

前節のドイツへの敬意と並んで指摘されるべきは、ケーベルの人文主義的教養の重視である。すなわち、「あらゆる真誠の教養の根源たる人文主義的教養」という表現に代表されるように、人文主義的教養はあらゆる教養の根幹であるとされる⁽²¹⁾。

ケーベルによれば、大学とは、そのような人文主義を身に着けた人々から成る結社であるべきであるとされる。

大学とは、瑣々たる競争や嫉妬を超越して、広告的ならずして、共同的に、正直に認識と最高の知的、道義的、美的及び宗教的完成に向つて努力精進するといふ理想的目的以外には何

等の目的をも有せざる、知的且つ道義的に独立不遜なる、人文主義的予備知識を具備せる人々の自由なる結合である⁽²²⁾。

しかし、日本の大学では、人文主義的教養は到底満足できる水準にはない。「文科大学長に答ふる書」の中でケーベルは、学生の人文主義的教養獲得の必要性を以下の通り訴える。

貴下も充分承知せらるる如く、一体学者なる者は、換言すれば人文主義的教養は日本に於ては今尚ほ全然欠如して居る。(中略) 人文主義的教養 (humanistische Bildung) は、学生の為に、将来に於ける自由なる、独立なる学術的活動に至る針路を開拓する所の、且つ日本人をして恐らくは亦精神的にも我等に比肩するに至らしむる所の唯一の手段である⁽²³⁾。

そして、その人文主義的教養の中味とは、ドイツ哲学・文学・芸術であり、また同時にギリシア文化の摂取であった⁽²⁴⁾。それゆえに、ケーベルが学生に対して幾度と主張するのは、古典語とくにギリシア語と、近代語においてはドイツ語の学習であった⁽²⁵⁾。これらを併せ持つケーベルは、人文主義的教養をもつ豊かな教養人であると、周りの学生から評価されたのである⁽²⁶⁾。ケーベルは哲学講義においても、幾度も古典語、つまりギリシア語あるいはラテン語による原典講読を学生に薦め、古典と古典語学習の重要性を説いた⁽²⁷⁾。

『続々小品集』で、トルストイ『肖像』の引用を行いながら、ケーベルはトルストイに代弁させる形で、人文主義的教養の輪郭が浮かび上がらせる⁽²⁸⁾。以下にやや長くなるが引用を行う。

おゝ、人文主義的教養よ、お前は苦勞なしには獲得されない！ それにも拘らず私はその代弁者である。(中略) 言ふ迄もなく私は穩健な古典主義の代弁者である、私はすべての測量手や機械師や、商人やまた鉄道従業員等がヴェルギリウスやホメロスを暗誦すべく強ひられるやうなことは望まない。(中略) 厳密な思考訓練のみがこの事を成就する、しかも何物も、適当な年齢に始められた古代語の学習以上に純粹思考の力を鍛錬するものは無いのである⁽²⁹⁾。

苦勞し、古代語の学習を通し、古典 (ヴェルギリウスやホメロス) を読み解くこと。そしてそれを通した厳密な思考訓練を経た上で、人文主義的教養が獲得される。古代語としてはとくにギリシア語、近代語としてはドイツ語を学習し、哲学・文学の古典を読み解いていくことを、ケーベルは東京帝国大学の学生らに期待したのであった⁽³⁰⁾。

3-3 教養と人格・振舞いと結びつき

最後に特徴として指摘されるべきは、ケーベルの教養を語る際に必ず述べられるとあってよ

い、教養ある「人格」という特徴である。ケーベルの同時代人の回想の多くには、ケーベルの教養ある人格、あるいは人格の崇高さが記される。

ケーベル自身、教養と人格あるいは振舞いを同一視して語ることが多い。たとえば、「教育 (Erziehung) と教養 (Bildung) の欠如を示す確かな証左は、余り多く、余り大声で又高調子で話すことである⁽³¹⁾」とケーベルは教養と話し方とを結び付ける。また、理想の生活について「バイエルンとかシュワーベンとか又はテューリンゲンとかの小都會に於ける、一般世間及び所謂『上流』社會から離れた生活、極めて尋常な確実な収入、精神的労作に従事し且つかに他人のために用を足すだけの可成りの健康、善良で、単純で、平静で其上教養のある人達 (gebildeten Menschen) より成れる知友の極めて小さな仲間、自宅に於いては同時に私の友達でもある如き忠實なる伴侶と助手、極めて多数の家畜⁽³²⁾」と述べるケーベルにおいては、教養と、人間の生活様式・人格が入り混じって語られている。教養と人格が不可分のものであることは、ケーベル自身も意識していた。日本の大学教授への批判を展開するなかで以下のように教養と人格の結びつきと、それらが教授者にとって不可欠のものであることを主張する。

私の所謂欠如せるもの (引用者注・日本の大学教授にとって) とは、即ち卓説せる人格、真誠なる大なる教養 (echte große Bildung) 及び尚ほそれよりも深き又豊富なる人生の経験を意味するのである。教授しまた教育し得んためには、人は何よりも先づ自ら或物であり、また学生から愛せられていなければならぬ⁽³³⁾。

ここで、日本の大学教授に欠如している教養とは、単なる学識や古典語の知識ではなく、畢竟、人格・振舞いを含めたものである。以下の引用にあるように、話し方だけでなく、歩き方、坐り方、著述の仕方、飲食の仕方、読書の仕方など、日常生活の行動面すべてを、教養が影響を及ぼす対象とケーベルはみていた。

如何なる点に於て人の教育と教養とを認別 (erkennen) すべきかを訪ねたいといふならば、(中略) 厳密にいへばそれは総ての点に存する。例へばその歩き振りと坐り方、その著物の著方、その飲み食ひの仕方と種類、その読書の種類と仕方、又いつ一即ち一日中の何れの時に一何を読むか、誰と最も好んで交わるかといふ様な点に⁽³⁴⁾。

ケーベルにとって教養とは、前項で明らかにした古典語学習を通じて獲得される人文主義的教養だけではなく、人間の振舞い全てを対象としたものであった。

3-4 ケーベル教養論の論拠 参照点としてのヒルティ

では、ケーベルの教養論はその論拠をどこに置くものなのであろうか。ケーベルは、教養を論

じる際にほとんどその理論的参照点を述べるところがなく、第二章で検討したように、先行研究でもケーベルの教養論の論拠は不明確なままであった。

しかし、ケーベルはわずかにその参照点としてヒルティ『幸福論』を挙げる。ケーベルは、ヒルティ『幸福論』の「教養とは何ぞや」に言及し、「以上のこと又更に新しきことを言ふことは出来ないと思ふ⁽³⁵⁾」と言い切る。即ち、ケーベルの教養論はヒルティ『幸福論』を大いに参照して構成されたものであるといえる⁽³⁶⁾。

では、ヒルティ『幸福論』の「教養とは何か」での教養論をみていきたい。

ヒルティは教養を次の通り定義づける。教養とは「もとは形のない粗野な状態を、それがおよぶ限り最上のものへと発展した状態、あるいは少なくとも妨げられずに最上に向かっている状態へ作りあげてゆくことである⁽³⁷⁾」。そして、教養の必要な三点を指摘する。これら三点はいずれも「生来の肉体的快樂と利己主義」を、「一段と高尚な関心事によって克服すること」。次に「身体と精神の能力を均等に形成することによって」克服すること。最後に、「正しい哲学的・宗教的人生観によって克服すること」である⁽³⁸⁾。

このように、ヒルティの教養論も、身体と精神の両方を重視する点で、ケーベルの教養論と近いものであると考えられる。ヒルティは「真の教養の証拠」について述べる。

真の教養の証拠は、まず精神の健康と力が次第にふえていくこと、ついで或種の非凡な才智が現れることである、そして最後はより大いなる人格 (größeres Kaliber der Menschen) であるが、こういう状態は決してほかの方法で誘致することができず、またまねできるものでもない。これこそ本当に教養の主要要素である⁽³⁹⁾。

教養の証拠としての人格。この点において、ケーベルの振舞いを重視する教養論とヒルティの教養論が重なる。さらに、教養の無いこととしるしとして、ヒルティは「大声の、厚かましい人柄」を挙げる⁽⁴⁰⁾。この点は、既にみたように、同じくケーベルが言及する点（「教育と教養の欠如を示す確かな証左は、余り多く、余り大声で又高調子で話すことである」）でもあった。

教養と人格を結び付ける点、そして話し方を始めとした振舞いを重視する点において、ケーベルとヒルティの教養論は重なる⁽⁴¹⁾。しかし、ヒルティの教養論においては、人文主義的教養や古典語への言及は見られない。ゆえにヒルティの教養論とケーベルの教養論を同一のものとして見なすことはできないが、これまで不明瞭であったケーベルの教養論の重要な参照点をなすものが、ヒルティ『幸福論』であったことが判明した⁽⁴²⁾。

4 考察 ケーベル教養論の内実とその歴史的 성격

本章では、これまでの検討を元に、ケーベルの教養論の歴史的 성격について論じる。第二章で検討した通り、先行研究では、大正教養主義に対するケーベルの影響力の大きさが指摘されてき

た。しかし、どのような点で影響があったのかは必ずしも明らかでなかった。

これまでの行論で、ケーベルの教養論の特徴として、「ドイツへの敬意」、「人文主義的教養の重視」、「教養と人格・振舞いの結びつき」の三点を明らかにした。また、ケーベルが教養論を展開する際に参照した文献は、ヒルティ『幸福論』であり、このヒルティの教養論は、とくに「教養と人格・振舞いの結びつき」を強調するものであった。

これら三点のうち、「人文主義的教養の重視」、「教養と人格の結びつき」という点は、これまでの研究で指摘されてきた「Bildungというドイツの教養思想」あるいは「19世紀ドイツ教養市民層のイデオロギー」と重なるといえよう⁽⁴³⁾。しかし、「ドイツへの敬意」は、非ドイツ人の立場からドイツ語を他の西洋近代語よりも高く特権的なものとして評価するものであり、他の二点とは位相が異なる。この点はケーベル教養論の歴史的 성격に影響をもたらしており、日本の大正教養主義世代に対して、ドイツ語の重視ひいてはドイツ文化の重視への影響を与えたものと考えられる。文化の享受を通しての人格形成をめざすエリート学生文化としての大正教養主義と、ケーベル教養論との関わりを見たとき、ケーベル教養論にある「ドイツへの敬意」が、大正教養主義に与えた影響は大きい。既に述べたように、旧制高等学校においてもケーベルの著作がドイツ語講読で教材として使用されたことを考えても、ケーベルは大正教養主義に対して、ドイツ語・ドイツ文化の重視という点で影響を与えたと言える⁽⁴⁴⁾。

また、ケーベル教養論の「人文主義的教養の重視」に見られる古典作品の読書の重視は、のちに大正教養主義への批判として向けられることになる、西洋古典の濫読という特徴の萌芽となりうるものであった。「先生は必ずしも厳密な意味での学者ではなかった。哲学の範囲でも論理学や認識論よりもむしろ形而上学や人生観に深い関心をよせ、教養として之を求め、従って文学、古典、神学などと殆ど区別されないかのようにであった⁽⁴⁵⁾」と語られるように、ケーベル自身は、西洋古典のジャンルを区別しなかった。このような読書の在り方は、大正教養主義の特質として今日理解される「(主に西洋の)文学、哲学、芸術を「あれもこれも」(sowohl als auch)と摂取することによって人格を成長させていく⁽⁴⁶⁾」態度に影響を与えたと考えられる。もっとも、たしかに古典の濫読という性質も看取されるものの、あくまでケーベルにおいて教養は、知識だけでなく振舞いも含むものであった事に留意しなくてはならない。

最後に、ケーベルに内在するその非政治性も、大正教養主義への影響の一つとして挙げられるだろう。ケーベルが生きた時代は、彼の敬愛するドイツも第一次世界大戦にはじまる大きな変動を受けた時代であるが、ケーベルが政治あるいは経済事情について語ることは皆無である。というのも、政治や戦争論議といった「この方面の事情は私には殆どわからないからである⁽⁴⁷⁾」ためである。非政治的であるという点は、阿部次郎『三太郎の日記』をはじめとした大正教養主義の非政治性と共通するものであった⁽⁴⁸⁾。

しかし、上述の諸点は、ケーベル教養論が大正教養主義にそのまま引き継がれたことを意味するものではない。とくに、ケーベル教養論において展開された「教養と人格・振舞いの結びつ

き」は、大正教養主義に受け継がれたとは言い難い特徴である⁽⁴⁹⁾。

5 おわりに

本稿の到達点と課題を示す。本稿は、ケーベルの教養論の内実を分析し、ケーベル教養論の歴史的 성격について検討した。結果、ケーベル教養論が「ドイツへの敬意」「人文主義的教養の重視」「教養と人格・振舞いの結びつき」という特徴をもち、同時代人のヒルティの教養論に影響を受けたものであることが判明した。このヒルティの教養論は、教養と人格との結びつきを説くものであった。

ケーベル教養論の歴史的 성격として、大正教養主義に対してドイツ語・ドイツ文化の重視（「ドイツへの敬意」）、古典作品の重視（「人文主義的教養の重視」）、そして非政治性という点において影響を及ぼした点を指摘することができる。その反面、ケーベル教養論の特徴の一つである「教養と人格・振舞いの結びつき」を、大正教養主義に見出す事は困難である。

これらの結果を踏まえての課題は、ケーベル教養論の受容に関わるものである。つまり、なぜケーベル教養論が、大正教養主義の起源としてみなされるほどに多大な影響力を与えることができたのか。ケーベルの教養論の当時の歴史的 文脈にそくした受容の詳細⁽⁵⁰⁾に関しては、本稿では十分に考察することができなかった。また、受容に関してはとくに「教養と人格・振舞いとの結びつき」をはじめとした、ケーベル教養論と、大正教養主義の教養理解との差異が重要である⁽⁵¹⁾。これらの点は、大正教養主義の展開を考えるにあたって考究が求められる。今後の研究課題としたい。

註

- (1) たとえば、教養概念の内実を問う近年の試みとして綾井桜子『『教養』研究の現状と課題』『教育学研究』第82巻第1号、2015年、65-72頁などがある。
- (2) ケーベルに関する基本的な年譜・書誌情報および主な同時代人の回想として、以下の諸文献を参照。『思想 ケーベル先生追悼号』岩波書店、1923年；関根和江編『「ケーベル先生とその時代」資料集』台東区芸術・歴史協会、1997年；角倉一郎・関根和江「ケーベル先生年譜」『東京芸術大学音楽学部紀要』、(23)、1997年、49-56頁；関根和江「ケーベル先生文献(その一)～(その三)」『東京芸術大学音楽部紀要』、(24)～(26)、1998～2000年；『ケーベル会誌』創刊号-第4号、1993-1996年。
- (3) 筒井清忠『日本型「教養」の運命 歴史社会学的考察』岩波書店、1995年、21-27頁；竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社、2003年、39-40頁。
- (4) 竹内、前掲書、40頁。
- (5) 三木清『読書遍歴』『三木清全集』第一巻、岩波書店、1966年、387頁。
- (6) 夏目漱石『思い出す事など 他七篇』岩波書店、1986年、132頁。
- (7) 例えば安倍能成は、一高時代からケーベル先生が「真の教養人 (man of culture)」であると聞かされてきた、と述べる。安倍能成「「ケーベル先生とともに」に序す」、久保勉『ケーベル先生とともに

- に』岩波書店、1951年、18頁。また、ケーベルのたたずまい・振舞いの影響を指摘するものとして、高橋英夫『偉大なる暗闇 師 岩本禎と弟子たち』新潮社、1984年、107-130頁。
- (8) 大正教養主義に属する世代がケーベルの感化を受けた点を指摘するものとして、坂本多加雄『知識人 大正・昭和精神史断章』読売新聞社、1996年、68頁。同時に、ケーベルの下に集った青年らの同質的な共同性も指摘される。参照、苅部直『移りゆく「教養」』NTT出版、2007年、61頁。
- (9) 伊藤直樹「教養のゆくえ ラファエル・ケーベルと大正教養主義」文化論研究会編『文化論のアーリーナ』晃洋書房、2000年、119頁。
- (10) 同上、109-116頁。
- (11) 渡辺かよ子『近現代日本の教養論 一九三〇年代を中心に』行路社、1997年、39-41頁。
- (12) 筒井、前掲書、88頁。
- (13) なお、久保勉訳・安倍能成編『ケーベル博士隨筆集』岩波書店、1928年はこれら三作品を再編集したものである。
- (14) 久保勉「序言」、M. Kubo (Hrsg.), *Lesestücke für höhere Schulen. Eine Auswahl aus Dr. R. Koebers „Kleinen Schriften“*, Iwanami, Tokyo, 1920.
- (15) ケーベルに薫陶を受けた旧制高等学校教師の代表的な存在は、夏目漱石『三四郎』の「偉大なる暗闇」広田先生のモデルとなった岩本禎である。参照、高橋英夫、前掲書。
- (16) ケーベル博士、深田康算・久保勉共訳『小品集』岩波書店、1919年、405頁 (= Raphael Koeber, *Kleine Schriften*, Iwanami, Tokyo, 1918, S.257)。
- (17) たとえば、以下を参照。「こういう先生が日本という国について何も知ろうはずがない。また知ろうとする好奇心を有っている道理もない、私が早稲田に在るといってさえ、先生には早稲田の方向が分からない位である」(夏目漱石、前掲書、134-135頁)。
- (18) 『小品集』、213-214頁 (= S.135)。
- (19) 同上、215頁 (= S. 135-136)。
- (20) ケーベルは、ロシアの音楽学校時代には、ドイツ語を学校で話し、ドイツ語の教科書を読み、ドイツの音楽に親しみドイツ人の教師にならいドイツ人の友人をもった。つまり、ケーベルの人格形成あるいは陶冶・修養といったものは、すべてドイツ語・ドイツ文化圏を通してなされたものであったのである。同上、217頁 (= S.136-137)。
- (21) ケーベル博士、久保勉訳『続小品集』岩波書店、1922年、30頁 (= Raphael Koeber, *Kleine Schriften. Neue Folge*, Iwanami, Tokyo, 1923, S. 19)。
- (22) 同上。
- (23) 『小品集』、423-424頁 (= S. 269-270)。
- (24) たとえば阿部次郎はケーベルの「自分の最も愛するのは希臘だといふ言葉」を回想している。阿部次郎「ケーベル先生の言葉」『秋窓記』岩波書店、1937年、407頁。
- (25) 『小品集』、405頁 (= S. 257)。
- (26) そのような評価の一例として、中桐大有「ケーベル博士とその弟子たち」『バイディア』(4)、1963、31頁。
- (27) 長尾宗典「ケーベルの哲学講義 高山樗牛・姉崎嘲風思想形成と「ドイツ観念論」」『史境』、(68)、2014年、10-11頁。
- (28) ケーベルはこのトルストイ『肖像』を「トルストイの書いたものの中で藝術的に最も完全せるものと做すところの薔薇のやうな創作」と最大限に評価する。ケーベル博士、久保勉訳『続々小品

- 集』、266頁 (= Raphael Koeber, *Kleine Schriften. Dritter Band*, Iwanami, Tokyo, 1925, S. 173)。
- (29) 『続々小品集』、275-276頁 (= S. 179-180)。
- (30) ケーベルは「就職の初年以來、余は余の聴講者の古典的研究に対する感覚 (Sinn) を覚醒するを以って余の任務として来た」と述べる (『小品集』、424頁 (= S. 270))。
- (31) 同上、204頁 (= S. 128-129)。
- (32) 同上、221頁 (= S.140)。
- (33) 同上、332頁 (= S. 208)。
- (34) 同上、208頁 (= S. 131)。
- (35) 同上、208-209頁 (= S. 131-132)。
- (36) ケーベル自身の蔵書にも、「幸福論」をはじめとした多くのヒルティの著作の所蔵が確認される。参照、東北大学帝国大学附属図書館『ケーベル文庫目録 (A catalogue of the Koeber collection)』、1943年、21頁。
- (37) 矢内原伊作・塩谷饒訳『ヒルティ選集3 幸福論 I』東京創元社、1959年、165頁 (= Carl Hilty, *Glück. Zweiter Teil*, J.C. Hinrich, Leipzig, 1907, S. 141)。
- (38) 同上、165頁 (= S. 141)。
- (39) 同上、171頁 (= S. 149)。
- (40) 同上、177頁 (= S. 156)。
- (41) ヒルティの教養論における振舞いの重視としては以下を参照。アルフレート・シュトゥッキ、国松孝二・伊藤利男訳『ヒルティ伝』白水社、1959年、146-147頁。
- (42) そもそも、ヒルティを日本に初めて紹介したのがケーベルであった。そして、岩本禎が第一高等学校のドイツ語の授業でヒルティ『幸福論』を教科書とすることで、ヒルティの著作が受容されていった。参照、「あとがき」同上、191-194頁。
- (43) 渡辺、前掲書、40頁；伊藤、前掲論文、109頁。
- (44) 大正教養主義におけるドイツ語・ドイツ文化の重要性については以下を参照。田中祐介「ドイツ語が輝いたとき 大正昭和戦前期の旧制高等学校におけるドイツの言語と文化の影響」、日独交流史編集委員会編『日独交流の足跡』雄松堂書店、2013年、233-238頁。
- (45) 「ケーベル先生」『石原謙著作集第十一巻』岩波書店、1979年、335頁。
- (46) 高田里恵子「人格主義と教養主義」、苅部直ほか編『日本思想史講座4 近代』ペリかん社、2013年、191-192頁。
- (47) 『小品集』、218頁 (= S. 138)。
- (48) 大正教養主義の非政治性を指摘するものとして、堀尾輝久「戦前における「教養」の存在形態」『天皇制国家と教育』青木書店、1987年、268-277頁を参照。
- (49) この点に関しては、「型の喪失」に代表される唐木順三の批判が広く知られている。唐木順三『新版 現代史への試み』筑摩書房、1963年。
- (50) この課題を考えるにあたって、興味深い指摘として、大内兵衛によるものがある。大内は、「先生の教養は舶来品である」(13) と指摘し、「また人々がそれを尊敬して、それを社会的な価値物としなくてはならぬ。そういう意味でケーベル先生がどうしてケーベル先生たり得たか、何故に日本であのときあれほど敬愛せられたか。それがいまではそうはいかぬか。そこに問題がある。」(15) とし、ケーベルを囲む社会的・学術的文脈への着目の必要性を指摘する。しかし、大内はケーベルの著作に基づいて考察を行っているわけではなく、上の指摘は、あくまで大内が時代を回想する際

の感想に留まるものである。大内兵衛「古典的教養はむずかしい『ケーベル先生とともに』をよむ」『心』、4(7)、1951年、12-16頁。

(51) たとえば、「大正教養主義時代の「教養」概念はビルドゥング [Bildung] 理念の意味において、哲学的・思想史的、文学的な「自己形成」「自己超越」「自己完成」概念として理解されていた」という指摘が参照される。ケーベル教養論には無い特徴である。櫻井佳樹「「教養」概念の比較思想史研究」、小笠原道雄編『教育哲学の課題「教育の知とは何か」』福村出版、2015年、80頁。